

岩泉町小本地区民生児童委員協議会

～大津波を越えて未来へ一歩ずつ～

(平成 25 年 5 月 17 日掲載記事)

(1) 震災後、少しずつ活動再開

岩泉町で唯一海に面している小本地区では、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災による大津波で 200 を超える住宅が被災し、3 名が亡くなり、一時 374 名が避難者となりました。

震災から 2 年余が経ちましたが、今なお 110 世帯 270 名余りが仮設住宅で暮らしています。一日も早い復興と当たり前の日常生活を取り戻すことが強く望まれています。

小本地区で活動している民生委員・児童委員は 12 名ですが、3 分の 1 に当たる 4 名が大津波で自宅を流されるなどの被害を受けました。幸い死者はありませんでしたが、被災した委員は、現在も仮設住宅での生活が続いており、自分たちの生活の他に委員活動もしなければいけないということで、個人への精神的な負担が震災前より大きくなっています。

それでも、震災後は仮設団地集会所に集まっての情報交換や定例会、諸行事の開催など、できるところから、みんなで少しずつ活動を再開しました。

(2) 復興への願いをともそう

一昨年の 7 月、震災から 4 か月が経過し、仮設住宅入居が完了したことを機に、小本地区の一日も早い復興に向けて、気運を高める活動を行なう会として「小本地区を元気にする会」を地区の有志 8 名で立ち上げることになり、民生委員も会長ほか 3 名が会員となって積極的に活動へ協力しました。

最初に取り組んだのは、「おもと夢灯り夕涼み会」です。これは、被災者の皆さんの健康と災害からの早期復興を祈念したもので、小本地区で例年 8 月 1 日に行われているお盆行事「迎え火」にあわせ、みんなで希望と復興のあかりを灯そうと地区住民に参加を呼びかけて行ないました。

当日は、180 名余りの参加者があり、浸水地域の沿道などに夢あかり約 160 個を灯し、復興への希望を込めました。午後 7 時に全員で黙とうを行い、トランペット生演奏の曲が響き渡るなか、手分けして夢灯りに点灯すると、津波が襲来した方向へ光の列が延び、先祖が戻る時の目印になると言われる迎え火もたかれ、参加者のなかには涙を流しながら思いに浸っている方もいました。

このイベントに協力し、被災者の人たちに少しではあっても希望と元気を与えることができたような気がしました。しかし、まだ「真の復興」への道のりは先が長く、できることから一步一步進めることが大事であると強く感じました。



(3) 「みらいにむけて商店街」オープンを祝う

次に取り組んだのが、一昨年 9 月の共同仮設店舗「みらいにむけて商店街」のオープニングイベントでした。このイベントは、仮設店舗のオープンを地域で祝うとともに、被災者や地域住民に希望と勇気を与え、復興に向けた気運を高めようで行なったもので、「小本地区を元気にする会」だけでなく、商店街、商工会、仮設団地自治会、漁協女性部が共催し、地域をあげて開催されました。

この商店街の開店は、釜石市に続き県内 2 番目となり、宮古・下閉伊地域では初めてで、町でも久しぶりに明るい話題となりました。

当日は、焼き鳥などの出店や復興祈願「餅つき大会」、ステージショーなどが行なわれ、活気にあふれたイベントとなり、民生委員・児童委員も会場設営・撤去からイベント進行まで協力を行ないましたが、「元気にする会」会員以外の民生委員もそれぞれの立場で参加協力を行ない、地域住民とともにみんなで開店を祝いました。



(4) 未来を信じて

小本地区の民生委員・児童委員は、震災後、従来の委員活動のほか、復興関係の様々なイベントなどにも積極的に参加し、協力を行なってきました。小本地区の一日も早い復興を願って、今、できることの積み重ねが必ず未来へとつながることを信じて、今後とも活動をしていきたいと思っておりますので、皆様方のご指導とご協力をお願いいたします。